

論 説

## 伊方町の地域活性化を目的とした高大官連携フィールドワークプロジェクトの ニューノーマルにおける実践と課題

牛 山 眞貴子 (地域資源マネジメント学科)  
秋 丸 國 廣 (社会連携推進機構)

Practice and challenges of high school-university-local government collaborative  
fieldwork activities aimed at regional revitalization of Ikata Town in New Normal

Makiko Ushiyama (Regional Resource Management)  
Kunihiro Akimaru (Institute for Collaborative Relation)

キーワード：地域づくり、高大連携、ニューノーマル

Keyword：Regional Revitalization, High School-University Collaboration, New normal

【原稿受付：2021年2月1日 受理・採録決定：2021年2月16日】

### 要旨

伊方町の地域活性化を目的とした地域人材を育成するための高大官連携活動を、これまでの地域住民を対象にしたヘルスプロモーションプログラムの開発と地域活性化イベントの開催に取り組み、伊方町支援による高大連携のフィールドワークプロジェクトとして計画した。当該地域と関係性が希薄な大学生でも不安を感じることがないように正課外活動による地域連携活動を行った。COVID-19感染拡大緊急事態宣言の解除後に、取り組みの計画立案と関係機関との協議を開始したため、感染予防対策に重点を置く活動となったが、高大官の連携が着実に機能して、合同練習の実施とコラボ作品上演を行うことができた。フィールドワーク活動における感染防止対策は、参加する大学側で行う対策と受入地域や高校側で行う対策が合致して初めて有効な対策となる。このような進め方が、ニューノーマルにおけるフィールドワーク実践のモデルとなり、それぞれの学びによる活動の継続性と地域活性化を目指した高大連携活動の発展に寄与できれば幸いである。

### 1. はじめに

愛媛大学と伊方町が平成27年3月18日に連携協定を締結したことを機に、正課外活動による連携活動を行うこととなった。平成27年度に連携活動（「踊る亀ヶ池温泉 feat. 愛媛大学ダンス部」平成28年3月11日～13日）を開始し、その後愛媛大学COC地域志向教育研究支援事業（平成28年度～平成29年度）及び伊方町地域調査研究等事業（平成30年度～令和1年度）で活動を継続実施した。具体的な取り組み内容は、地域住民を対象としたヘルスプロモーションプログラムの開発と地域活性化イベントの開催で、それぞれ「多世代参加型健康づくり運動教室」と「踊る亀ヶ池温泉」として実施した。その中で、地元県立高校2校（三崎高校、川之石高校）へ連携依頼をしたところ、高校生の参加を実現することができた。その後も、年々参加する高校生が増えている。また連携活動の一環として、三崎高校「総合的な学習の時間」で社

会共創学部の学生が高校生のプロジェクト企画（健康班「高齢化の進む地域の活性化を考える」）を支援し、オリジナル体操「みさこうたいそう115」の制作に至った<sup>1)</sup>。

本フィールドワークプロジェクトでは、これまでの活動に参加した地元高校生のうち2名が愛媛大学社会共創学部へ入学したこともあり、高大連携活動により重点を置き、将来地域活性化に携わる人材の意識づけを目的としたスポーツによる地域活性化プロジェクト「伊方ワールド・オブ・ダンス」を展開することとした。本取り組みでは、前年度末に予定した地域のにぎわいづくり活動「踊る亀ヶ池温泉ばあと5」が、新型コロナウイルス感染症の全国拡大期であったため急遽中止になった経緯を踏まえ、ニューノーマル時代の連携活動のあり方を強く意識して計画する必要があった。本稿では、ニューノーマル時代の地域連携活動の実践と課題について報告するものである。

## 2. フィールドワーク連携活動の内容

### (1) 正課外活動による地域連携活動と高大連携

愛媛大学は愛媛県内の全自治体と連携協定を締結しているため、様々な自治体から学生生活の企画相談がある。担当する教員を通して学生は関係人口として地域連携活動を行うが、取組みの継続性や地域活性化へ効果が得られるかは学生にとっての活動を行う理由やその地域への愛着度などによって影響を受ける。伊方町からヘルスツーリズム事業での連携相談があった際には、愛媛大学COC事業として、学生の地域における活動の一部として教育学部生の卒業研究を支援した。地域の高齢者の健康づくりのきっかけとするヘルスプロモーション活動を、巡回訪問型での高齢者への個別及び多世代参加型運動教室で運動指導を行った<sup>2)</sup>。さらに、地域連携活動の継続性と地元への活動定着を考慮し、正課外活動による活動と地元高校と連携を計画し、多世代参加型運動教室と地域イベントを開催した。学生が中心になって行ったこの取り組みで、地域における正課外活動が学生側の行動変容等へ与える効果について検証したところ、正課外活動で培った能力を地域社会において駆使し貢献することにより学生個人のパーソナリティ特性の改善や地域への愛着傾向促進の効果が明らかとなった(H28年度愛媛大学COC地域志向教育研究経費成果報告書)。これまでの取り組みを通して、正課外活動を基とした地域連携活動において、学生は自己肯定感を高め、より積極的に関与するものと思われた。

地域での健康づくり活動では、地域住民との関係性構築が重要であるが、地域との関係が薄い大学生だけではそのために比較的時間を要する。事実、先に示した当初の取り組みでは、巡回訪問型運動指導と地域健康教室の実施という複数回にわたる活動を経てようやく信頼性構築ができた<sup>2)</sup>。一方で、これまでの地域にぎわいづくり活動において、地元高校生が参加することで地域住民と関わりを持つことが比較的容易であることを経験した。そこで、地域連携事業における高大連携の深化と拡大を目的に、多世代参加型健康づくり運動教室における運動指導の支援やにぎわいづくり活動をより地元志向を高め、地域住民をより深く巻き込む活動とするための高大連携によるフィールドワークプロジェクトを企画した。

### (2) 実施概要

前年度試験的に三崎高校文化祭で高校生と大学生によるダンス作品の公演「伊方ワールド・オブ・ダンス」を行った。地域の方や高校教諭から「生徒の自己肯定感を高め、積極性に繋がる活動」との評価があり、令和2年度事業では高大連携を主たる目的としたが、社会状況を確認しながらのフィールドワーク

計画となった。要点は、①感染防止対策を十分行う、②大学生が指導する練習時間を十分確保する、③高校生と大学生によるメッセージ発信、の3点で、活動計画は一方的な依頼とならないよう高校側と協議を重ねて立案した。県立学校における学校教育活動の再開と愛媛大学における出勤制限が段階的に解除され始めた7月14日に三崎高校の担当教諭と打ち合わせを開始するとともに、伊方町補助金申請を行った。社会状況等を確認しつつ、合同練習を重ね、文化祭で公演を行うこととした。高校における教科学習の遅れから2学期時間割などの予定で練習時間の確保が課題と思われたが、三崎高校が学内外での学び、地域とのつながりを通じた学びを重視し、イベント参加も大事に育成とすることもあり<sup>3)</sup>、「総合的な学習の時間」に加え、ホームルーム等の時間まで割くなどの配慮もあり、各回2時間の練習時間確保した合同練習を予定通り9月以降に開始した。合同練習のスケジュールと各回の大学生参加者数及び高校生参加者数は以下の通りであった。

- ◆9月17日(2時間)大学生2名、高校生16名
- ◆9月24日(2時間)大学生3名、高校生16名
- ◆10月8日(2時間)大学生3名、高校生12名
- ◆10月29日(2時間)大学生5名、高校生14名

合同練習では、本プロジェクトの主担当大学生1名が振付指導を行い、同行した大学生は指導支援と個別に高校生の指導を行った(図1、図2)。振付指導においては、作品の構成から2グループに分かれて練習を行った。プロジェクトに参加した高校生は、全学年から参加があったため、学年行事の進行上練習に参加できない日もあった。練習不足を感じる生徒には、三崎高校の体育教諭が時間外などを利用して練習指導を行った。



図1 三崎高校体育館での合同練習の様子(1)  
大学生による高校生への振付指導は2グループに分かれて行った。大学生はマウスシールドを着用した。



図2 三崎高校体育館での合同練習の様子(2)

高校生と大学生が共有するプロジェクトの目的は、  
①行動を自粛せざるを得ない状況下でも心は自粛しない、コロナ禍を乗り越えて新しい時代を創る。  
②皆さんが住んでいる地元を、より元気にするために、三崎高校生と愛媛大学ダンス部がありったけの力を合わせて文化祭で踊り、盛り上げていこう。  
この2点のメッセージを発信することとした。

三崎高校文化祭は、予定通り11月1日に開催し、大学からはダンス部学生有志10名が参加した。ダンス公演は、午後の生徒会企画イベント内に三崎高校イベント班のダンス発表として30分の公演がプログラムされた。ダンス部学生の4作品演技のあと、コラボ作品「夢を追う」を大学生10名と高校生17名で演技した。観客は、三崎高校の生徒と教諭、生徒の家族等、オープンキャンパスに参加していた中学生とその保護者、地域の方など、約250名であった(図3)。



図3 三崎高校文化祭でのコラボ作品上演

プロジェクトに参加した学生のうち、社会共創学部1回生2名はともに県外出身者で、入学後自宅学習が続いたため、大学生として初めての地域フィールドワーク参加となった。実施後1回生2名にヒアリング(面談)を行ったところ、高校生との合同練習における現地ダンス指導を通して①ステイホームによるストレスなど入学後抱えていた精神的不安の解消、②学びのモチベーションの回復、③体力の回復、④地域を身近に感じる経験の獲得、⑤上回生との絆の醸成、⑥高校生への指導経験による自己肯定感の高まり、感想の中に、これらの点が顕著に表れていた。

### (3) フィールドワーク実施における感染防止対策

公益財団法人日本スポーツ協会は、各種スポーツイベントを再開するに当たっての基準や、再開後の開催時における感染防止拡大予防のための留意点をガイドラインとして発信した<sup>4)</sup>。手指消毒の徹底やマスクの着用など日常生活での感染予防対策と同様の対策が求められていることに加え、スポーツイベント開催・実施時の感染防止策については、参加者の距離の確保、イベント中の大きな声での会話や応援の禁止等が示されている。

愛媛大学は、学生・教職員ならびにその家族の健康と安全を確保しつつ、安心して教育活動が実施できる環境を維持することを目的に「愛媛大学新型コロナウイルス感染症に対する教育活動BCP(Business Continuity Plan/事業継続計画/令和2年4月8日版)」によって感染拡大防御の指針を示した<sup>5)</sup>。その指針において、9月の感染状況(以下、ステージ)は「イエロー」であった。

#### 【イエロー・ステージ】

- ・感染状況：愛媛県内の新規感染者増加数が1日数名～10名程度で安定的に推移している場合、または県内において感染の拡大の恐れがあると判断される場合
- ・教育活動：遠隔授業を積極的に実施する。ただし、感染拡大防御に配慮しつつ対面型授業も実施することができる。
- ・研究活動：安全環境下に研究を実施する。教職員は必要な研究を実施する。学生はできる限り自宅にて研究を実施する。ただし感染防御に十分配慮しつつ学内施設を利用することができる。分野によっては部局長の判断により活動「可」とする。

イエロー・ステージ下におけるBCPに従い、学生の地域連携活動への参加に際し、大学へ活動許可申請を行った。また、イベント当日への参加についても、教育・学生支援機構長及び学生生活支援課へ学外活動届を行った。許可申請時に、「感染防止対策の徹底、事前の体調管理、参加前の検温、健康確認調査、消毒の実施」を行うことを示し、合同練習参加時には、出

発前に健康確認調査等を行い、調査書を学部事務へ提出した。三崎高校までは、車で片道2時間半程度かかるが、車中では全員マスクを着用し、無駄な会話は避け、窓を開けるなど換気に努め、途中2、3回の休憩を挟むなどの防止策に努めた。

合同練習では、飛沫拡散防止のため、学生と教員はマスク着用もしくは透明のマウスシールド着用とした。高校校舎へ入るときは、用意しておいた手指消毒用スプレーを使い、手指消毒した。高校生に対しては、三崎高校が愛媛県の体育授業実施に関する方針に従い、十分な換気を確保した場所で、マスク着用による呼吸困難を避けるため運動時にはマスクを着用せず、パーソナルディスタンスを保つことで感染予防とする、とのことから、挨拶や説明時以外はマスク着用を個人で選択できることとした。また、体育館での練習では、出入り口や換気窓を開ける等、十分な換気を確保した(図4)。



図4 合同練習時における感染防止対策  
上→(a) 下→(b)

大学教員及び大学生はマスクもしくはマウスシールドを着用して、全体説明を行った(a)。高校生は、説明を聞くときはマスクを着用し、運動時はマスクの着用を個人で選べることとした(b)。

文化祭当日は、三崎高校の感染防止対策に従い、控室は常に換気に努め、リハーサル及び公演時以外は常にマスクを着用し、手指消毒を定期的に行った。文化

祭には、高校生とその保護者、地域の方に加え、当日がオープンキャンパスを兼ねてのイベントであったため、次年度入学希望者とその保護者など、地域外の参加者も多数いたが、来場者は学校からの基本的感染防止対策への協力依頼に従い、手指消毒の徹底とマスクの常時着用、大きな声を出すような声援の自粛に努めていた。前年度実施した際には、演者が観客席迄入り込み、ハイタッチをするなどの観客を演技に巻き込むことを行ったが、今回の演技では演技スペースと観客スペースは明確に分け、またその間隔を2m以上とる等の配慮を行った。

このように、本フィールドワーク活動全般で、十分な感染防止対策をとることができたが、フィールドワーク活動における感染防止対策は、参加する大学側で行う対策と受入地域や高校側で行う対策が合致して初めて有効な対策となると思われた。なお、実施後から2週間経過観察を行ったが、参加した大学生・高校生、及び大学教員、高校教員、来場者の体調不良・怪我・感染の兆候の報告はなく、本プロジェクトは無事終了した。

### 3. ニューノーマル連携活動の実施における課題

前年度実施した文化祭での合同作品演技に参加した高校生のさらなる地域活動への参加意欲の向上を狙い、ヘルスプロモーション活動とにぎわいづくり活動を企画していたが(2020年3月時点)、大学における課外活動の実施に対して自粛要請となった(愛媛大学トピックス「新型コロナウイルス感染症拡大の防止に向けた課外活動の自粛について」2020年3月3日)ため、イベント実施について伊方町と相談した。その結果、高齢者を対象にした活動であったことから直前に中止となった。本フィールドワークの発展として、高大官連携による地域住民を対象にした運動教室と地域のにぎわい活動の実施を計画しているが、前回の中止措置も考慮すると、(1)新型コロナウイルス感染防止対策の徹底、(2)そのための自治体や高校との連携、(3)遠隔地フィールドワークにおける学生の学びの確保(時間、経費)が課題であると思われる。地域連携活動において、大学生が感染源とならないよう感染防止対策をとることが極めて重要であるが、大学の課外活動に関する方針に従い、活動許可を得たうえで計画を進めなくてはならない。また、現在正課外活動において、宿泊を伴う合宿や遠征は禁止制限となっているため(愛媛大学トピックス「令和2年12月1日以降の課外について」2020年12月1日:県内外を問わず合宿・遠征やイベント等については許可を取り消し、当面の間、活動を禁止)、従来現地に宿泊して実施していた予定の変更が必要であり、それに伴う移手段の

確保なども課題となる。感染防止対策は「3密回避」を基本とすることは当然なこととして、活動実施においては連携自治体・組織の方針に従い、相互に対策をとることが必要である。そのために、大学の活動方針に従いつつ、連携自治体や高校との綿密な打ち合わせを行わなければならない。

本イベントは、三崎高校との二度目の取組であり、連続して参加した三崎高校イベント班リーダーから「また一緒にダンスができるコラボダンスをウキウキして取り組んだ」「ダンスが上手にできるか最初は不安だったが、大学生の皆さんの指導のおかげで、全力で踊りきることができ、感動した。」など感謝と感動体験を綴った手紙が届いた。また三崎高校教員から「粘り強く優しい大学生の指導と生徒の成長していく姿を嬉しく感じた、かけがえのない経験であった。」「大学生の皆さんの頼もしさに感心し、このコロナの状況の中、歯がゆい思いもしているのですが、その明るさと笑顔でまた感動を与えてください。」と大学生への心温まる応援メッセージをいただいた。このように高校生と大学生との協働は、心の通い合った交流を促進し、高校生に「今ある自分の未来」に繋がるヒントを投げかけることができる。同時に、地域の方々との直接的なコミュニケーションを通して学生が学ぶことの意義は大きく、フィールドワークでしか達成することができない学びの機会でもある。この貴重な機会が喪失しないよう、格別の配慮が必要と思われる。今後予定している「にぎわい活動イベント」の開催においても、主催者である伊方町、協力機関である高校とイベント開催に向けた協議を重ね、地域での学びの最適化と最大化ができるように、大学として地域性適時性を踏まえたフィールドワークプロジェクトを創出し、地域で育つ次世代の成長に向けて注力しなければならない。

#### 4. おわりに

本プロジェクトは、地域活性化のための人材育成・きっかけづくりを目的に高大官連携でのフィールド活動を計画し、感染防止対策に十分配慮して実施した。高校生と大学生に対して、今後予定している地域イベントへの参加意義づけができたと思われる。またコロナ禍におけるニューノーマルを検討しながら、当初の活動目的や活動内容は計画した通り実施し、学生の地域での学びを達成することができた。

実施後2週間の経過観察を行ったが、参加した大学生・高校生、大学教員、高校教員、来場者の体調不良・怪我・感染兆候等の報告はなく、無事終了している。

今後、フィールドワークの企画においては、実施計画の段階で、感染防止を第一に本来のフィールドワー

クの目的を損なわないための参加する側と受け入る側との協議がより必要になるだろう。今回の進め方が、ニューノーマルにおけるフィールドワーク実践のモデルとなり、それぞれの学びによる活動の継続性と地域活性化を目指した高大連携活動の発展に寄与できれば幸いである。

#### 謝辞

本プロジェクトを遂行するにあたり、地域調査研究等事業支援補助金を交付頂いた伊方町様、協力校である愛媛県立三崎高等学校の教職員、生徒の皆様など多くの方に、高大連携に取り組んでいただきました。ここに心より感謝の意を表します。

#### 注

- 1) キャリアガイダンス Vol.432,50-51,2020.
- 2) 牛山眞貴子、來住奈那美、秋丸國廣：伊方町における高齢者の健康マネジメント実践報告、愛媛大学社会共創学部紀要 1 (1) ,105-109,2017.
- 3) 文部科学省令和元年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力型）「みさこう・せんたんプロジェクト～佐田岬半島・地域デザイン人材の育成～」,2019.
- 4) 独立行政法人日本スポーツ振興センター・ハイパフォーマンススポーツセンター（2020.5.20）：新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策としてのスポーツ活動再開ガイドライン（HPS版）,1-10
- 5) 愛媛大学 HP 新型コロナウイルス感染症に対する教育活動 BCP（令和2年4月8日版）<https://www.ehime-u.ac.jp/>  
（最終閲覧日：2020年12月4日）

